

研究ノート

美術館における教育普及活動の長期的プログラムの現状と課題 —担当学芸員へのインタビュー調査から—

弭書榛[†]

[†] 東京大学大学院教育学研究科

現在の日本の美術館における教育普及活動は単発的・短期的なイベントが中心であり、深い学びを促進する点で不足があると考えられる。本研究では、長期的プログラムが参加者にとってより良い学習効果を提供する可能性について検討した。長期的プログラムを実施している2つの美術館の担当学芸員にインタビューを行った結果、以下のことが明らかになった。1. 長期的プログラムは、単発のプログラムよりも個人の学びに大きな影響を与える；2. 長期的プログラムは、美術館を中心としたコミュニティの形成にも寄与する。一方で、多くの美術館で長期的プログラムがほとんど実施されていない背景には、人的・物的リソースの不足が関係していることが判明した。このリソース不足が、長期プロジェクトの学習効果が具体的に検証されていない要因にもなっている。これらの結果から、長期的プログラムの可能性と、それを推進するための課題が浮き彫りになった。

キーワード：博物館学，美術館教育，生涯学習

目次

1 はじめに

- 1.1 背景
- 1.2 本研究の目的
- 1.3 調査の概要

2 インタビュー調査の結果

- 2.1 短期的プログラムの目的
- 2.2 長期的プログラムの目的
- 2.3 長期的プログラムの内容
- 2.4 長期的プログラムを通しての参加者の影響・変化
- 2.5 長期的プログラムから生まれた関係
- 2.6 学習効果に対する評価方法
- 2.7 長期的プログラムの現状

3 まとめと考察

1 はじめに

1.1 背景

文化庁によれば，“博物館は資料を収集して保管し，調査研究して資料の価値を評価し，その成果を展示やさまざまな手段で広く発信し，すべての人々に学びや楽しみを提供する機関である”¹。特に，学びを提供する機能は多くの場合“教育普及”といい，人々の生涯にわたる学習の機会を提供し，様々な形で博物館の研究結果を発信するという機能である²。美術館は博物館の中の一つの種類であり，美術博物館とも呼ばれる。

日本の美術館数は，令和3年10月で1305館を数える³。公益財団法人日本博物館協会の「令和元年度日本の博物館総合調査研究報告書」によると，“博物館が力を入れている活動”（表1）⁴では，全体としては“展示活動”の取り組みが一番であるが，“教育普及活動”は18%を占め，二番目に位置する。

表1：博物館が力を入れている活動

	平成9年 (N=1,891)	平成16年 (N=2,030)	平成20年 (N=2,257)	平成25年 (N=2,258)	令和元年 (N=2,314)
一番目					
1. 調査研究活動	7.8	7.3	7.0	6.8	6.8
2. 収集保存活動	17.1	11.1	9.6	10.0	8.1
3. 展示活動	59.5	61.6	63.0	62.2	64.3
4. 教育普及活動	12.4	15.8	17.2	17.3	18.0
5. レクリエーション	1.6	2.2	1.5	2.1	1.9
無回答	1.6	2.0	1.7	1.6	0.8
二番目					
1. 調査研究活動	13.4	11.6	11.1	11.1	11.6
2. 収集保存活動	30.5	24.8	23.9	21.2	20.9
3. 展示活動	22.7	22.2	21.8	24.0	21.7
4. 教育普及活動	26.2	32.4	34.6	36.9	38.9
5. レクリエーション	3.1	3.5	3.5	3.9	4.6
無回答	4.2	5.5	5.2	2.9	2.4
三番目					
1. 調査研究活動	27.3	25.1	27.9	26.4	28.3
2. 収集保存活動	22.6	26.9	25.4	28.0	26.2
3. 展示活動	9.5	8.6	8.5	7.5	8.6
4. 教育普及活動	26.9	23.4	21.8	24.3	22.1
5. レクリエーション	6.2	6.7	7.0	8.5	10.5
無回答	7.5	9.2	9.4	5.4	4.2

大きな変化として、教育普及活動に力を入れている館の増加が指摘されている。教育普及活動が活発化するにしたがって、美術館は生涯学習の場としての役割を果たし、利用者は次第に学びの主体として捉えられるようになった。

学校教育とは異なり、美術館は社会教育施設として、すべての利用者に対して自由かつ主体的に学べる場を提供する理念は、既に戦後の時代から提唱されてきた。

戦争直後の1949年に「社会教育法」が制定され⁵、1951年に博物館法が制定され、博物館を社会教育機関と位置づけた⁶。1960年代、国民が真に自主的で自立した学びを実践できるようにするために、学芸員の設置や施設環境整備に注力し⁷、1970年以降、美術館は第三世代に入り、市民の主体的な学びと地域社会での日常利用を支援する役割を担うとされた⁸。続いて1980年代、美術館は教育普及活動を通じ、“近代美術の普及”から“美術館利用の普及”へと変化したとされる⁹。1990年代には、“生涯学習への関心の高まりに伴い、美術館は社会教育機関としての役割を強化し、教育普及活動が市民生活に定着するようになった”¹⁰。

上述の教育普及活動の歴史的変遷から、美術館が社会教育の場として生涯学習の機会を提供することは、政府が人々の自主・自立的な学びと自己発展を強く求めている姿勢を反映している。一方で、アートを通じた自己学習への需要は、21世紀の今日においても衰えることがない。多くの美術館利用者が教育普及活動に積極的に参加する傾向がその証左である。しかし、現在の美術館は果たして、真に深い質の学びを実現していると言えるのだろうか。

筆者は2023年から、国立新美術館教育普及室でのインターンシップを経て、教育普及活動に関するアンケート集計業務に多く携わった。参加者にプログラムへの感想を尋ねたところ、ほとんどの参加者が“楽しかった”と記述し、アートの魅力が教育普及活動で伝わるのは好ましいが、参加者の自発的な学びや深い理解がどれほど進んでいるかは不明である。

現在の美術館の教育普及活動は、言ってみれば展覧会の補佐的な印象であり、イメージとして展覧会を来場する際に参加できる短時間のイベントなどがあると下道は述べる¹¹。教育普及プログラムの開催回数が限られ、時間も短いという課題

があることから、参加者の学習成果を得ることや、その学習効果を検証することが難しいと指摘されている¹²。

上記の単発ワークショップの限界を克服するため、体験時間を延ばす「長期的プログラム」の試みがあった。この継続的な参加により、参加者の自発的学習意識の向上や深い学びの効果が期待される。しかし、全国 82 館の美術館の教育普及現状を調査し、公開されているウェブページの内容を分析した結果、本研究ノートが定義する長期的プログラムを実施しているのはわずか5館に過ぎないことが判明した。つまり、長期的プログラムを実施している美術館はまだ極めて少ない状況であることが明らかとなった。

1.2 本研究の目的

美術館の教育普及活動がどのように参加者の学習の効果促進に寄与するかに関しては、既に多方面から研究が行われている。例としては、佐倉市立美術館の“ミテ・ハナソウプロジェクト”の鑑賞プログラムの研究から、深い学習を促すための条件と参加時間の関係性の解明が試みられている¹³。一方で、一般来館者における長期的プログラムの学習効果については、これまで詳細に論じられてこなかった。国立新美術館の“NACT YOUTH PROJECT 新美塾！”は参加者に対して長期的な実践を行ったが、学習効果の詳細な掘り下げはまだ行われていない¹⁴。

長期的プログラムを実施する美術館は依然少数であるため、本研究ではその実践に焦点を当てた。2つの事例を分析し、学芸員へのインタビューを通じて、長期的プログラムの現状やその課題を解明する。さらに、これらを基に長期的プログラムの学習効果の可能性を考察し、美術館が社会教育機関としての有効性を高める一助となることを期待する。

1.3 調査の概要

本研究では、“半年以上かつ 6 回以上の定期的な実施で、固定された参加者を対象とする連続的

な教育普及活動”を長期的プログラムと定義する。明確にこの用語を定義した先行研究がないため、現在の実践の状況を踏まえ、このように設定した。

長期的プログラムは、定期的な参加者を対象に継続的に実施され、美術館の展覧会事業とは独立している点が特徴である。また、参加者との持続的な関係を築きつつ、個人の学習時間を増やし、アーティストや学芸員といった高度な専門性を持つ人々と接する機会を提供する。これにより、参加者はアートの受動的な理解から主体的な活用、さらに日常生活への応用へと進展するといった深い学びの効果が見られる。具体的に、“以前に興味を持たなかった科目を積極的に学ぶ”、“卒業後も創作を続け、さまざまな活動を積極的に理解する”などが 2.4 で確認できる。本稿ではこれらの要素を“深い学び”と位置づけている。

具体的には、6 か月間のユースプロジェクト“NACT YOUTH PROJECT 新美塾！”（国立新美術館）と、講義・実技・鑑賞の3方向から構成される“世田谷美術館美術大学”（世田谷美術館）を取り上げた。

国立新美術館は 2007 年に設立され、当初より教育普及事業を美術館の三大支柱の一つと位置づけている。“参加し創造し交流する”をテーマに、様々な教育普及活動を実施し、人々がアートの本質に触れる機会の提供を目指している。

2022 年、VUCA (Volatility [変動性], Uncertainty [不確実性], Complexity [複雑性], Ambiguity [曖昧性・多義性]) の時代とも呼ばれる現在においての若い世代が、“いつの時代にあっても価値やあり方の確実性に問いを投げかけてきたアートと出会い、日々感じている違和感や好奇心を探求し、表現する場を提供するため、10 代の中高生を対象とした新しいプロジェクト「NACT YOUTH PROJECT 新美塾！」”¹⁵を立ち上げた。

国立新美術館の特徴である“アーティスト・ワークショップ”を元に進化した新美塾の活動内容は鑑賞教育と造形ワークショップの外にも、オンライン＋オフライン両方開催の集会在毎月開催される。また、“ミッション”と呼ばれる通信教育キットや、“ラジオ”というコンテンツも設けられ

ている。2022 年度には 6 ヶ月間、計 13 回の集会、計 10 個のミッションや、計 17 回のラジオが行われた。

一方、世田谷美術館は、教育普及活動が盛んになった 1980 年代に登場し、日本初期の美術館教育普及事業を積極的に推進した美術館の一つである。多くの世田谷区民の“継続的な講座を望む”声に応え、開館前から大場区長の意志のもと構想され、世田谷区文化課の要請により、開館 2 年目の 1987 年に世田谷美術館美術大学が開講された¹⁶。

世田谷美術館の教育普及活動を通して、受講者は美術館を自らが作る体験ができる場所として認識することができた。またそれ以上に、作り、考えるというプロセスの中からも新たな視野を得ることができたと受け止めた。毎年の講座は 60 人を定員とし、毎年 5 月から 12 月までの期間で、毎週火曜日と木曜日に 2 回の授業が行われている（コロナ禍では中止や変則的な開講となった）。講座の講師は大学講師、評論家、現役アーティストなどが担当していることが特徴である¹⁷。美術大学の講座内容は、講義、実技、ワークショップ、鑑賞会を組み合わせ、様々な側面からアートの本質を考える総合的な授業である。

2023 年 7～12 月に、“新美塾”や“美術大学”を実際に見学した後に、現在これらの長期的プログラムを担当する学芸員 2 人（国立新美術館・吉澤菜摘氏、世田谷美術館・吉田絵美氏）に対し、表 2 の質問事項に基づき、1 時間ほどのインタビューを行った。両氏からは、氏名の公表も含め、調査結果公開の承諾は得られている。インタビューの目的は、長期的プログラムの現状、学芸員の意識・役割および参加者の学習への影響について、調査・探求することである。

インタビューは、予備調査を通じた質問項目に基づき、半構造化面接法を用いて行った。その記録を逐語的に書き起こし、フレーム分析法¹⁸により分析した。今回の分析では、理論枠組みに基づいて回答を分類（例：動機、学習効果）し、理論との一致・不一致を比較し、共通点や特異な現象をまとめ、最終的に理論の検証や修正を行った。

2 インタビュー調査の結果

2.1 長期的プログラムの目的

長期的プログラムを分析する前に、まず現在の美術館で主流となっている短期教育普及プログラムに着目し、その目的について考察する。短期

表 2：学芸員へのインタビュー時の質問項目

-
1. 長期的プログラムを作ったきっかけはなんですか？
 2. 長期的プログラムの目的・目標について教えてください。
 3. 長期的プログラムの運営形式について教えてください。
 4. 長期的プログラムと単発ワークショップの違いはありますか？
あればそれについて教えてください。
 5. 長期的プログラムではどんな学習内容を設置していますか？
 6. 長期的プログラムに参加した方にどんな変化が起きましたか？
 7. その変化はなぜ起こったと思いますか？
 8. その変化を検証していますか？
 9. 長期的プログラムが少ない現状についてどう思いますか？
 10. 長期的プログラムをどのように企画しますか？
 11. 実施するそれぞれの段階で乗り越えたことはなんですか？
 12. 将来も長期的プログラムを続けて実施したいですか？それはなぜですか？
-

的プログラムがどのような意図で企画されているのかを把握することが比較を進める上で重要である。

吉澤：国立新美術館のワークショップを大きく分けると2種類があって、アーティスト・ワークショップは人数が少なめで、長時間をかけてぎゅーっとやるんです。それ以外に、もうちょっと気軽に参加できて、制作を体験するワークショップをやっています。いろいろな層の人に、気軽に美術館に足を運んでほしい、アートについて深く思考するというよりは、もうちょっと美術館で過ごす時間を楽しんでもらうためのワークショップです。

吉田：短期的プログラムとして、一般向けに様々な単発ワークショップを行っています。気軽に美術館で創作体験をしてもらいたい、作品を鑑賞するだけでなく創作ができる場（地下創作室）もあるということを知ってもらいたい、ということが主なねらいです。また、世田谷美術館のボランティアである“鑑賞リーダー”が発案したプログラムであることも重要な特徴です。

学芸員の発言から、現在の短期的プログラムの非常に重要な目的の一つが、美術館での楽しい経験を増やし、より多くの利用者を引き寄せることであると分かった。これにより、利用者の学習要求にはまだ大きな差があることを明確にした。深い学びを求めている一部の利用者がいる一方、大多数はまず芸術に触れ、感じる段階に留まっていることが示されている。

2.2 長期的プログラムの目的

では、長期的プログラムはどのような目的で設立されたのだろうか。

吉澤：実は国立新美術館は、中高生向けのプログラムがあまりできていませんでした。ワークショップも実施回数としては少ない

です。（中略）10代という若い世代、自分の心とか体とか、将来のこととかを今作り上げている途中の世代が、アートとアーティストに出会うことで、自分の力にもなるし、社会にだんだん出ていく上でいろいろ出会う課題に取り組んでいく、乗り越えていくための創造的な力をつけてもらいたいと思ってやっています。それから、学校とは違う場所、体験を提供したいという思いはあります。

吉田：“美術大学”は開館前から実施が決まっていたそうです。開館年（1986年）に前身の講座が実施され、翌年から半年間にわたる長期の講座となりました。それから毎年開講しています（筆者注：改修工事等の休館年を除く）が、現在は“美術ってなんだろう”と美術の本質を探ることを目指したカリキュラムを組んでいます。（中略）講師も、アートに対する考え方や価値観や重要視している部分があえて異なる方を意識的に依頼しています。（中略）アートってひとつの正解があるわけではないということを考えてもらいたいんです。（中略）単に創作技術を習得するための講座として運営しているのではなく、美術館にしかできないこと、美術の本質に迫る施設だからこそできることを追求しながら実施しています。（中略）美術館は社会教育施設でもあるので、生涯学習の場として、学校教育とは違う角度や方針でやれることもポイントです。

上述の発言から、長期的プログラムは短期的なものより深く掘り下げられ、単なるアートの体験を超え、参加者の個人的成長や自己内発的な学習を重視していると言える。これにより、美術館は社会教育施設として生涯学習の場を提供する役割を深刻に果たしていると考えられる。

2.3 長期的プログラムの内容

長期的プログラムのカリキュラムは体系的な学習内容構造の役割を果たしている。より深い質の学びを追求したい人がいかにその目標を実現し、より良い学習効果を得るかは、プログラムの内容設定と密接に関連している。

吉澤：よく下道さん（筆者注：塾長の下道基行氏）が、新美塾では技術とか、考え方を教えることはしませんとおっしゃっているのですが、美大とか予備校みたいに、通うことで何かスキルが身につくわけではないんです。とにかく、その子たちがこれまでの生活の中ではしていない、いろいろな美術の体験をしてもらいたいと思うんです。

吉田：美術の面白さとはなんだろう、という問いに向き合い続けたいと思っています。（中略）いろんな角度から学ぶ必要があるなど。美術史を学ぶことで美術に対する考えが豊かになるかも、社会と美術の関係性や、美術が他分野の芸術とどう関わりをもってきたとか、音楽・パフォーマンスとかも含めて美術って様々なジャンルと横断しているというのがあると思いますし、実技をやってみることで鑑賞体験も深まると思います。いろんな側面から取り組んでみて、美術ってどういうことなのかと考えられるようなカリキュラムを目指しています。

長期的プログラムの内容は通常は単一ではなく、実施方法も多様であることがわかった。また、短期間で達成できる技術の習得に比べて、長期的プログラムの内容は参加者自体の学習とその無意識的な変化に重点を置いている。これにより、長期的プログラムは参加者の視野を広げ、いろいろな美術体験を通して潜在的な興味を刺激し、さらなる内発的な学習モチベーションに転換する可能性があると考えられる。複数回の実施と多様性のある内容設定の上、質の深い学びの基盤を提供していると言える。

2.4 長期的プログラムを通しての参加者の影響・変化

では、実際に長期的プログラムに参加した人々は、そのプロセスを通じてどのような変化や影響を受けたのだろうか。

吉澤：新美塾の場合は半年間、ミッションに繰り返し取り組んで体験を重ねるので、参加者が自分がある世界や日常に向ける目線や考え方がすごく変化していくと思います。新美塾に参加して下道さんに関わることによる影響という意味では、すごく経験の幅が広がっているはずです。（中略）日常にあるものが自分にとって何なのかを考える力がすごくついていっていると思います。（中略）新美塾はそういう全体的な人間の力がつく場所になっていて、そういうところに影響しているのかなと思っています。

吉田：（美術大学を）修了後に自主映画を作っている方たちもいるんです。美術大学の実技授業には、絵画や彫刻だけでなく、映画のワークショップが3日間組み込まれています。美術大学で初めて映画制作を体験し、のめり込む方もいらっしゃる。影響力は大きいと感じています。（中略）全必修型の半年間のカリキュラムであることで、美術の新たな側面に広く触れることはできているのかなと。60代以上の受講生が多いですが、長い人生で培われた価値観は揺るがなくても、新たな行動の動機にはつながっていると感じます。

長期的プログラムでは、多岐にわたる内容と形式を通じて、参加者のアートに対する認識は比較的長い期間で絶えず変化している。さらに、個人差があるため、これらの変化には差異があり、独自に進展している。

これにより、参加者は最初、受動的にアートやその背後にある表現を理解する段階から、徐々に主体的になり、さらにそれを日常生活に応用し、

行動するようになると説明されている。これは短期プログラムでは達成が難しい、より深い学びだと考えられる。

この一連の進展する内在の変化が、参加者の日常行動に反映されている。その結果、インタビュー中に挙げた事例として“以前に興味を持たなかった科目を積極的に学ぶ”“卒業後も創作を続け、さまざまな活動を積極的に理解する”などの現象が生じているのではないだろうか。こうした影響は一朝一夕では与えられない。同時に、一部の変化が単発的な教育普及活動で実現できたとしても、短期間ではその変化を判明することは難しいとされている。

2.5 長期的プログラムから生まれた関係

インタビューでは、長期的プログラム自体がもたらす学習効果に加えて、2名の学芸員がプログラムを通じて生まれる関係についても言及していた。

吉澤：半年間で下道さんと参加者との関わりがすごく深くなるし、参加しているユースたち同士も交流していくことになるので、
(中略)自分と同じ世代の多様な考えを知る機会になっていると思います。本当に学校以外の場所ができるという感覚だと思います。新たな居場所にもなるんだと思います。(中略)数は少ないですが、高校生の時に新美のワークショップに参加した子が、大学生になってボランティアさんになってくれたことがあります。

吉田：美術大学で半年間、週2回通われることで、しだいに美術館へ親しみを感じてくださる方が多くいらっしゃいます。1990年代に“修了後もまだ関わりたい”という受講生の声があがったことで、鑑賞リーダー（ボランティア）制度も発足しているんです。何度も通ううち“自分たちの美術館”という意識が生まれ、職員のお手伝いではなく、美術

館でできる面白いことを常に考えてくださる。ボランティアが美術館を作っているともいえる欠かせない存在です。

このように、長期的プログラムは確かに強力な関係を築くことができると言える。この強い関係は主に2つの側面に現れる。一つは参加者同士の関係であり、もう一つは参加者と美術館との関係である。

前者の場合、長期的プログラムによって参加者同士や参加者とアーティストとの間で強力な相互刺激が生まれ、多角的な視点からお互いに影響を与え、学び合う効果がある。さらに、美術大学の場合では、卒業生が同好サークルを結成したり、同級生の展示を定期的に企画したりするなど、コミュニティとして形成された自主的な学びが進化していく様子が見られる。

後者の場合は、美術館と地域を緊密に結びつける助けになった。長期の接触によって生まれる関係の進展はプログラム終了後も美術館を利用し続け、積極的に美術館に貢献する動機が呼び起こされた。

2.6 学習効果に対する評価方法

次に、長期的プログラムの学習効果に対し、美術館側が実施している評価方法について検討していく。

吉澤：参加者に現れる変化は長期的に現れてくるものだと思うので、なかなか数字で測るのが難しいなど。終了後に保護者の方にアンケートしたり、参加者にも半年ぐらいたってからアンケートしてみて、卒業した後の変化を追っていくことで、何らの客観的な評価ができないかと思っています。記録集では、やったことを全部載せてはいますが、どのような変化や成果があったのかを客観的に示せてはいません。

吉田：修了時に受講生にはアンケート回答をお願いしていますが、アンケートのデータ以上に、修了後の長期的なかわりや活動が評価といえるのではないかと感じます。修了生対象の“ステップアップ講座”にどれくらい参加してくれているか、また“同期会”が存続していることや、鑑賞リーダーへの参加割合などがそれに値するのではないのでしょうか。

これらの発言から、現段階では美術館が長期的プログラムにもたらす効果についての検証が意図されているが、具体的な効果についての分析がまだ充分に行われていないのだと言える。理由は以下2点のように考えられる。

まず、現在の美術館の評価方法は主にアンケートなどの量的研究に依存しており、参加者の具体的な変化を十分に捉えることが難しい。将来の研究では、学習効果の検証には主にインタビューなどの質的研究を行い、調査アンケートを補完する方法が採用できるだろう。

次に、思考などの目に見えない変化はしばしば具体化にかなり時間を要する。この点については、卒業してから何年か経過した参加者に対するフォローアップ調査を行うことで、改善される可能性があると考えられる。

2.7 長期的プログラムの現状

現在、日本の美術館が行っている教育普及活動の中で、長期的プログラムはまだ非常に少ないといえる。この状況について、2人の学芸員はどのような考えを持っているのか。

吉澤：正直、やむを得ないと思っています。国立新美術館は比較的、日本の中でも大きい美術館です。(中略)その新美でも専任の教育普及スタッフは3、4人で、この人数で新美塾をやるのは本当に大変だと思っています。それに加えて、今までの事例が少ないので、その実績やこういうことをやることによる

成果、効果というのがわからない。(中略)“あ、こういう成果が出てくるんだ”ということが、世間や業界内にもわかってくると、また違う動きが出てくるのではと思っています。

吉田：長期プログラムの運営は、専任の教育普及担当がいなければ、業務のボリュームや質の維持の観点からしてもなかなか厳しいと思います。一方、単発プログラムでは得られない長期プログラムの効果や影響は非常に大きいです。(中略)美術館のミッションとして長期プログラムを継続していく限り、如何にそれをよくしていくか、数年前に先輩から引き継いだ担当者として考え続けたいですし、開館前から構想を持っていた行政にも助けられていると思います。

これらの2人の学芸員の発言からは、長期的プログラムが非常に重要な意義を持っている一方で、現在はいくつかのやむを得ない課題に直面しており、それが長期的プログラムの実施を難しくしていることが示唆されている。

まず、美術館の教育普及事業においての人手不足の問題がある。この問題について以下の2点が考えられる。

第一に、長期的プログラムを展開するには相当な労力と時間がかかる。教育普及担当の学芸員が非常に限られている状況で、教育普及活動の種類を豊富にし、かつ多くの人が参加できるようにするためには、重点を単発の教育普及活動に置かざるを得ない。また、人手不足も、2.5で提起された参加者個々の学習効果の検証が難しい理由であると推測できる。

第二に、長期的プログラムの計画、たとえばカリキュラムの設計には3～5年といった長期の展望が必要である。現在、美術館の学芸員の人員は流動性が大きく、常勤の学芸員が極めて限られている状況で、長期的プログラムに専念できる学芸員は非常に限られた存在ではないだろうか。次に、運営に関する資金の問題である。長期的プログラムは人的・物的リソースの両方に多くの投資が必

要であり、これらの資金と労力はごく少数の人々にしか投入されない。発言から得られる情報によれば、発言から得られる情報によれば、“美術大学”は行政の提案で始まり、現在も自治体の補助金に支えられている。事業予算の確保により、30年以上の長期プログラムが継続可能となっている。

一方で、新美塾の場合は美術館が提唱したプログラムであり、美術館の資金が限られている現状であるため、外部の支援が必要な場合もあると予測される。良好な成果が得られない場合、資金分配で優位性を確保するのは難しい傾向があると考え。また、2.6で述べたように、長期的プログラムは短期間で成果を検証することが難しい。これが資金を確保してプログラムを運営する上での課題と言える。

3 まとめと考察

筆者は、現在の美術館が主に提供している単発の短期プログラムでは、参加者により深い個人学習の機会を十分に提供できないという課題に着目し、学習回数を増やす長期的プログラムの可能性を探究した。そして、長期的プログラムを担当する2名の学芸員へのインタビュー調査を行うことで、単発の短期的プログラムが中心という現状の原因、長期的プログラムが参加者にもたらす影響、長期的プログラムの課題という3点に焦点を当てて考察した。

まずは、単発の短期プログラムが中心という現状の原因について、主に以下の2つを指摘した。

第一に、教育普及活動の非独立性である。教育普及活動はここ数十年で大きく発展したが、美術館の主要な業務は未だ展覧会の企画・実施である。そのため、現在の教育普及活動は、大抵展覧会を中心に展開されることとなり、展覧会に関連するイベントとして展覧会体験の向上に寄与しているが、教育普及活動が展覧会に依存している。言い換えれば、教育普及活動自体に独立性が不足している傾向がある。

第二に、美術館の教育普及活動の重要な目的の一つが、来館体験を通して来場者を増やすことで

ある。そのため、より気軽に参加でき、より参加者数を多く受け入れられる単発の教育普及活動が積極的に展開されている。

このような課題があるため、展覧会から独立した教育普及事業、その中で長期的プログラムに焦点を当て、国立新美術館と世田谷美術館の2つのケースについて調査と分析を行った。そして、これら2つの長期的プログラムの現状や参加者への影響をさらに理解するために、担当者である2人の学芸員にインタビュー調査を実施した。

調査を行った結果、まず、長期的プログラムが参加者にもたらす影響について以下の2点が挙げられる。

第一に、長期的プログラムは短期的プログラムでは達成できない、参加者に対する深い学びの効果をもたらす。実際の実例を通じて、参加者は最初の受動的にアートやその背後にある表現を理解する段階から、徐々に主体的になり、さらにそれを日常生活に応用するようになる。質の深い学習は、長期的プログラムを通して提供できると考える。

第二に、長期的プログラムは美術館を中心とするコミュニティの形成を促進できる。長期の接触で生まれる参加者同士または参加者と美術館の相互の信頼関係は、美術館を参加者の居場所とすることができる。一方で、プログラムによりつくられるコミュニティが存在するため、個人の孤独感を減少させ、ウェルビーイングの維持にも効果があると考え。

これらの課題を解決するために、本研究では、参加者の学習効果を深くさせ、かつ持続的な関係を構築するような新たな“長期的プログラム”の必要性を提案した。

さらに調査結果から見てきたのが、2点の長期的プログラムの課題である。

第一に、現在、多くの美術館は長期的プログラムの展開は難しいと考えられる。これは、美術館の教育普及を担当する学芸員が人手不足であり、かつ長期プログラムを運営するための資金が十分でないことと関連している。行政のサポートや

専任の常勤学芸員がいない状況で、長期的プログラムを展開することは非常に難しいと言える。

第二に、長期的プログラムが参加者に与える学習効果については、まだ十分な検証が得られていないと考えられる。これは、長期的プログラムがもたらす思考上などの目に見えない変化は、しばしば具体的な形で表れるまでに相当な時間を要するので、半年の期間内では、これらの影響を捉えることは難しいと言えるからだ。

また、現在の美術館の評価方法は、主にアンケートなどの数量的な調査に頼っており、参加者の具体的な変化を十分に把握することが難しいという理由も挙げられる。これに対し、今後は、主に質的研究を中心にし、量的研究と組み合わせた手法を用い、参加者へのインタビュー調査という研究方法で行う予定である。

長期的プログラムの影響が反映されるまで時間がかかるため、調査対象は参加者だけでなく、卒業生も含め、長期的プログラムに参加してから数年後の追跡調査も行うことを通して、学習効果をさらに探究していきたい。例えば、参加者の活動過程の一部を録画して分析し、段階的なアンケート調査やインタビューを実施することも考えられる。これらの研究を通じて、美術館における教育普及活動の内容を改善できるよう貢献していきたい。

注

¹ 文化庁博物館総合サイト。“博物館ってなに？” 入手先 URL: <https://museum.bunka.go.jp/museum/> (アクセス日: 2024-12-13)

² *loc. cit.*

³ 文部科学省総合教育政策局調査企画課。“令和3年度社会教育統計(社会教育調査報告書)の公表について” 入手先 URL: https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa02/shakai/kekka/k_detail/1419659_00001.htm (アクセス日: 2024-12-20)

⁴ 日本博物館協会『令和元年度日本の博物館総合調査報告書』文化庁, 2018, p. 13-15.

⁵ 伊藤長和“日本の社会教育・生涯学習—その特質と課題—”〈小林文人・伊藤長和・李正連編著『日本の社会教育・生涯学習—新しい時代に向けて』大学教育出版, 2013〉p. 4-7.

⁶ 文化庁, *op. cit.*

⁷ 新海英行“戦後社会教育の生成と展—改革から反改革—”〈小林文人・伊藤長和・李正連編著『日本の社会教育・生涯学習—新しい時代に向けて』大学教育出版, 2013〉p. 37-39.

⁸ 伊藤寿朗“現代博物館考”『調査季報』vol. 94, 1987, p. 6-7.

⁹ 菖蒲澤侑“美術館の教育普及機能の変遷と展望”『美術教育学研究』vol. 48, no.1, 2016, p. 235.

¹⁰ 遊免寛子“兵庫県立美術館の教育普及史：兵庫県立近代美術館時代”『兵庫県立美術館研究紀要』vol.11, 2017, p. 57.

¹¹ 下道基行“中高生向けの‘表現の塾’を作る”〈国立新美術館・下道基行編集『NACT YOUTH PROJECT 2022 新美塾！記録集』国立新美術館, 2023〉p. 6.

¹² 菖蒲, *op. cit.*, 2016, p. 233-240.

¹³ 熊谷薫・石幡愛編『佐倉市立美術館ミテ・ハナソウ・プロジェクト事業評価報告書』ミテ・ハナソウ・プロジェクト連携実行委員会, 2018, p. 8-10.

¹⁴ 国立新美術館・下道基行編集, *op. cit.*, 2023, p. 56-61.

¹⁵ 山際真奈“新美塾！前夜”〈国立新美術館・下道基行編集『NACT YOUTH PROJECT 2022 新美塾！記録集』国立新美術館, 2023〉p. 4.

¹⁶ 世田谷美術館編集『世田谷美術館年報』世田谷美術館, 1988, p.52.

¹⁷ 上村武男“世田谷美術館‘美術大学’の実践—講座を受講した体験からの報告—”『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』vol. 23, 2013, p. 68.

¹⁸ Semetko, Holli A. and Valkenburg, Patti M. Valkenburg. “Framing European Politics: A Content Analysis of Press and Television News,” *Journal of Communication*, vol. 50, no. 2, 2000, p. 93-109.

The current state and challenges of long-term educational programs in art museums: An interview-based study with program educators

Shuzhen MI[†]

[†]Graduate School of Education, the University of Tokyo

Education programs in art museums are often short-term events that may lack the depth needed to foster profound learning. This study examined the potential of long-term programs to improve learning outcomes for participants. Interviews with educators from two art museums that run long-term programs revealed the following insights: (1) Long-term programs have a greater impact on individual learning compared to one-off events; (2) They also contribute to the formation of communities centered around the art museum. However, the lack of long-term programs in many museums is linked to insufficient human and material resources. This resource shortage also hinders the concrete evaluation of the learning effects of long-term programs. These findings highlight the potential benefits of long-term programs, as well as the challenges that must be addressed to implement them effectively.

Keywords: Museology, Museum Education, Lifelong Learning